

深澤 賢治著

『陽明学のすすめⅢ』

中里 麦外

本書は『陽明学のすすめ』シリーズの第3弾である。問のすすめ』を書かした

第1巻の『陽明学のすすめ』——経営講話「抜本塞源論」が出版されたのが2005年9月のことだから、ほぼ1年に1冊のペースで刊行されてきたことになる。

いずれにしても、さまざまな筆力といわねばならない。かつて、明治という時代が、福沢諭吉をして『学

問のすすめ』を書かした

現代への危機感示す

もまた、平成という時代精神の促しによって生まれたもの、といつて差し支えないだろう。それほどに、著者の時代に対する危機感

の人間とその思想の原点を、父祖の遺訓や覚書の中にさぐり、さらに、時代のエートスとしての陽明思想への傾倒ぶりを的確に伝えている。

は、〈七十七条憲法〉になぞらえての章立てであろう。本書においては、まず本文の読み下し文を示し、次いでわかりやすい「口語意訳」と洞察に充ちた「解説」を施している。

『陽明学のすすめ』は、いわば一種の予言の書であり、黙示録的性格を帯びているところが大きな魅力であろう。本シリーズは全10巻で完結というから、残すところあと7冊だ。次巻の刊行を楽しみに待ちたいと思ふ。

本書は「山田方谷の人物像」、「擬対策」（対策に擬う）、「詩」の3部で構成されている。「山田方谷の人物像」の部は、方谷

「擬対策」（対策に擬う）は、いわゆる修身斉家、治国平天下の要諦が17条にわたって簡潔に述べられたものだが、この17条という数

「詩」の部を設けた理由について著者は「山田方谷にとって詩はどういう存在であったかを考えると、方

（群馬社会福祉大教授・文学博士）

書評

谷の人物像」の部は、方谷

は、いわゆる修身斉家、治国平天下の要諦が17条にわたって簡潔に述べられたものだが、この17条という数

「詩」の部を設けた理由について著者は「山田方谷にとって詩はどういう存在であったかを考えると、方

『陽明学のすすめⅢ』は 明德出版社刊。1890円。

